

「猛毒キノコの探究 (6)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

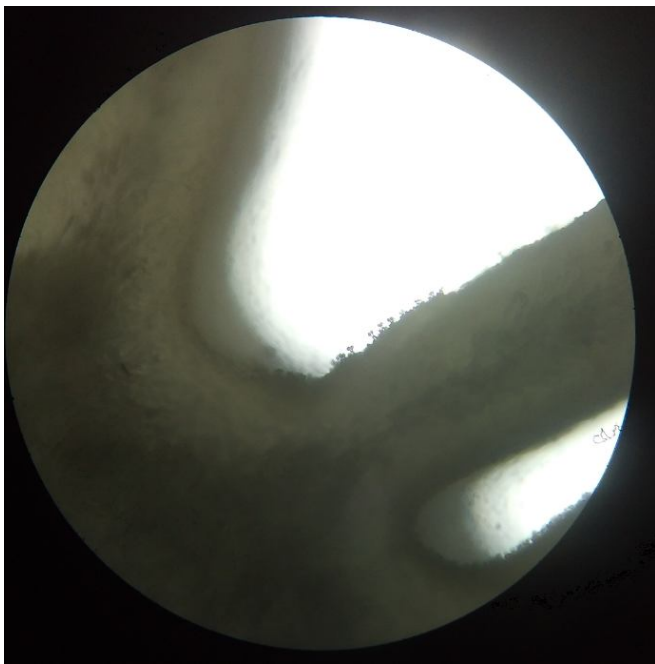
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

キノコ(子実体)の役割はただ一つ、胞子を作ってそれを拡散させることだ。胞子が作られるのは、通常は傘の裏側の「ヒダ」の部分だが、種類によっては傘の上面や(ヤグラタケなど)、子実体の内部(ホコリタケやツチグリ)で胞子が形成される種類もある。



キノコの胞子は、通常胞子紋の一部をスライドに採って、胞子のみを観察する。しかし私は、胞子そのものよりも、ヒダの上にどのように形成されているのかを知りたいと思い、写真のようにヒダを薄く縦切りにして、直接スライドに載せてみた。



まずは、低倍率(40倍)で観察した。確かにヒダの表面に何か突起物のようなものがたくさん見えてきた。特にヒダの一番奥(基部)付近に多く見られる。どうやらこれが「猛毒菌の胞子」のようだ。



次に倍率を100倍にして観察した。シロタマゴテングタケの場合、胞子も菌糸も完全に無色なので、透過光のほうが有利である。しかし今回は、透過光と反射光を併用してみた。どうやら、胞子は一つの基盤(担子器)も2個ペアで付いているようだ。こうした様子は、胞子だけを観察したのではわからない。



更に倍率を上げて、400倍も使ってみた。400倍になると、対物レンズと観察物の隙間を1mm程度まで近づける必要がある。ピントを合わせるのは非常に難しく、特に立体的な対象物では極めて慎重なピント合わせが必要だ。一番右の担子器には胞子が2個見える。しかしそれは重なって見えていただけで実は4個のようだ。中央の担子器には4個の胞子が見える。一番左は、すでに胞子を飛ばしたあとの担子器だろう。